

もっと知りたい

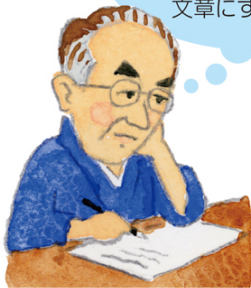
武者小路実篤

『白樺』の文学

ざっし 雑誌として日本中で販売されたことで、多くの方が『白樺』を読みました。それは、明治・大正時代の文学に新しく大きいひとつの流れを作ることになります。

『白樺』創刊の頃(明治43年)、日本の文学は「自然主義」がブーム……

人間の欲や社会の不平等、
皆が目を背けることこそ
文章にするべきだ。



見たままの世界を
そのまま書くぞ。
自分の意見は絶対に
書かないんだ。



新しい雑誌『白樺』が登場!

人間や社会には
こうあってほしいなあ。



自分の意見を、自分なり
の方法で表現するぞ!



今月号もそれぞれの個性が
生きていて素晴らしい!



十人十色、一人一人が自分
の考えを言える場所を作り
たかったんだ。

武者小路実篤



『白樺』を読んだ全国の若者がフィーバー!

僕たちが待ち望んで
いたのはこれだ!



来月号が
待ち遠しいなあ!



日本近代文学をひもといてみると、『白樺』は人間らしさや個性を大事にする「人道主義」、理想を追い求める「理想主義」と言われます。今でこそ、それらは当たり前のことですが、この頃はとても珍しくて新しい考え方でした。

*日本近代文学とは、明治・大正時代を中心とした日本の文学のこと。

文学好きの学生だった芥川龍之介君は、『白樺』の登場を「文壇の天窓を開け放って、爽やかな空気を入れた」と言ってくれたなあ。



『白樺』に載った1240作を超える文学作品の中には、今でも多くの人に読み継がれる名作があります。

\\ 多くの作品を載せた同人ランキング! //

- 1位 武者小路実篤……375回
- 2位 小泉 鐵……210回
- 3位 長與善郎……204回
- 4位 柳 宗悦……147回
- 5位 木下利玄……65回

僕が毎号必ず載せるから3年目に初めて休んだ時は、志賀が珍しがって『白樺』で報告していたよ。結局、その1回以外は全ての号に書いたなあ。



武者小路実篤

武者小路実篤『その妹』

大正4(1915)年
第6巻第3号発表
戦争で失明した画家の兄が、妹の支えで文学者として生きていこうとするストーリー。台詞で物語が進む「戯曲」で、舞台上で何度も上演されています。

志賀直哉『城崎にて』

大正6(1917)年
第8巻第5号発表
山手線(電車)にはねられるという志賀自身が体験した大事故をきっかけに、人間や動物の生死をとおして命について考える作品。

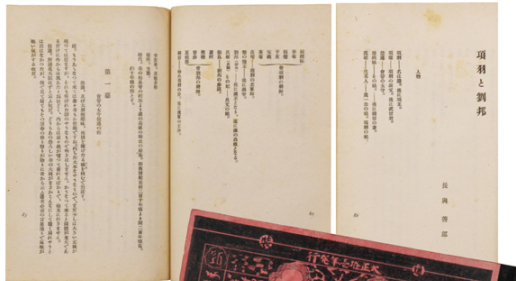
有島武郎『或る女』

明治44(1911)年
第2巻第1号から第5巻第3号まで連載
困難な時代に、自分の気持ちを貫いて強く生きる女性を描いた物語。「或る女のグリンプス」という題名で発表した作品を手直しし、題名を「或る女」に改めた。



有島武郎『或女 後編』 大正9(1920)年 叢文閣

文学者と画家が集う『白樺』だからこそ生まれた名作もあります。



『白樺』第7巻第9号
大正5(1916)年9月

長與善郎『項羽と劉邦』
大正11(1922)年
新潮社

僕が「項羽と劉邦」という戯曲を『白樺』に載せたら、それを読んだ河野君が挿絵を描いて展覧会に出していたんだ。素晴らしかった!



長與善郎



河野通勢が描いた挿絵(下図)
大正10(1921)年 墨・紙

展覧会を見た長與君から「本にするからもっと挿絵を描いて」と依頼されて、表紙も描いたんだ。とても光栄だったよ!



河野通勢